

(連載「ワイワイガヤガヤ経営品質」)

### 三重県経営品質協議会運営委員長 長友 隆司 (Kairos 社長)

#### 個性的な経営品質向上活動 万協製薬

今年、2007年度の三重県経営品質賞は万協製薬と富士ゼロックス三重がともに優秀賞でした。残念ながら知事賞の該当はありませんでした。

さて、万協製薬の松浦社長、最近あちらこちらで講演する機会もあるとのこと、ご存知の方も多いかもかもしれません。万協製薬は、三重県多気に社屋を構えている会社。ホームページを見ると、歌は流れてくる、社長の趣味のフィギアがゾロンゾロン並んでいる、正直なところ「どんな会社？」とびっくりしてしまうほど個性的。しかし業績はこの10年でナント46倍。OEM供給している大手製薬会社は引きも切らず。常に100%の工場稼働率を誇るという「超」がつくほどの優良企業。

松浦社長は冗談ばかり言っているように見えますが、実は真剣に経営を考えている優れた経営者。大変な照れ屋で「真面目なことを言うこと自体が照れ臭い。パッと笑いに包んで話を前に進めたい」そんな関西人特有さが、時にご本人の生真面目さに勝ってしまう、伊勢弁で言う「おもしろい感じ」のご仁です。

経営品質向上活動への取り組みも個性的。審査後、経営品質報告書をネットで公開してしまうのです。「社外秘もあるやろ」と水を向けても「大丈夫や」としか言いません。万協製薬を良く知っている人は、経営品質に取り組んで「本当に変わってきた」と言います。

ものづくり企業での変化というのは本当に大変なこと。生産工程はそれぞれの会社が心血を注いで作り上げた自慢のライン。コストも納期も品質もギリギリまで追い込んで、もうこれ以上は望めない、という地点からさらに雑巾を絞り上げるようにして改善を積み重ねます。

よく「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」と言います。そういう追い込み方をして作り上げたものづくり企業にとって経営品質との出会いは鮮烈なものがあります。私自身、サラリーマン人生のほとんどをものづくり企業で過ごしてきました。当然、地面を這いずり回るような思いで「カイゼン、カイゼン」と、日々の業務の中に埋もれてきました。

そんな時に「自社の強みを見て、あるべき姿を考えて」と経営品質は、まったく違う考え方を教えてくれました。暗闇に閉ざされていた地平線が光でズズッと広がっていくような思いがしました。

苦労人の松浦社長もおそらく同じような思いがしたのではないのでしょうか。

実は現場の問題は個別の世界。他社に通じることがあっても必ず自社に適用できるとは言い難い。世界に冠たるトヨタ生産方式についても同じ。トヨタで成功しているからと言ってわが社で成功する保証などどこにもない。そこを経営品質は「自社の良さを信じて自分で考える」と言ってくれました。気持ちが切り替わります。

「自分で考える」ということは「多様性を認める」ということでもあると思うのです。同じ一つの事実から考えていっても考える人の立場や見方によって結果は様々。アプローチだって違わず。「多様であることが自然」だと思うのです。

そこに松浦社長のように個性的で考え続ける経営者が、三重県という片田舎で経営革新を続けられる理由があると思うのです。「多様であること」が、新たな坂の上の雲を今再び追い掛ける原動力になる、地方でもできる証になっている、のではないのでしょうか。

さらなる万協製薬の取り組みに期待して一句。「天耕の峯に達して峯を越す」誓子